



若者へのメッセージ 18

歌人 佐佐木幸綱

【第三回】言葉は時代をこえる

言葉には、年齢、性別、さらには時代をこえて交流できる地平があります。万葉集時代の歌人でも現代のわれわれでも、短歌形式の前、言葉の前では平等です。いつの時代の誰をライバルに選んでもかまわない、言葉の天才たちと私たちが対等に付き合うことも可能なのです。

勝海舟の書いた短冊

わが家に勝海舟の短冊があります。祖父の佐佐木信綱が他界するまえに私にくれたものです。子供だった信綱が、目のまえで勝海舟に書いてもらった短冊です。

短冊には「盛年不重来 一日難再晨 与信綱子 海舟散人」とあります。「散人」とは、閑人・無用の人の意味で、雅号などにそえる語で

す。「海舟」は本名ではなく雅号ですから、後につけたわけですね。

書いてもらった漢詩は、中国の詩人・陶淵明の詩からの引用です。「若いときは二度とはこない、一日に朝が二度ないように」の意味です。若いうちにしっかり勉強しなさい、そんな意味ですね。

二人が出会ったのは、明治十七年（一八八四）一月。当時の歌人・鈴木重嶺が主宰する正月の歌会の席上でした。その日、父親にさしつかえ

ができたため、代理として長男の信綱が出席しました。大人ばかりの中、信綱は短歌を作って提出しました。出席者の一人・勝海舟が信綱が出した短歌を読んでその出来に感心し、ご褒美に短冊を書いてやろう、そう言って書いてくれたというのです。

「幸せだよ、海舟先生はこんな席で短冊を書いて下さる方ではない。そういつてまわりの大人たちにうらやましがられた」と、信綱は思い出を書いていきます。この時、信綱十三歳、勝海舟六十二歳でした。

テレビドラマの一場面のような話ですが、じっさいにあったことで、短冊がちゃんと残っています。

言葉には時代をこえる力がある

十三歳と六十二歳とはふつうは交流するとはありません。二人が話ができしたのは短歌という共通の場があったからです。短歌という詩型、そして言葉のおかげと考えていいでしょう。十三歳も六十二歳も、言葉ならば同じ地平に立てるわけです。言葉には時代をこえる力があるのです。

極端な例をあげれば、万葉集時代の歌人でも現代のわれわれでも、短歌形式の前、言葉の前

色紙
プレゼント
のお知らせ

■佐佐木幸綱先生ご揮毫の色紙を1名様にプレゼントいたします。官製はがきに、「佐佐木幸綱先生の色紙希望」と明記のうえ、「若者へのメッセージ」に対するご意見・ご感想を添えて、編集部宛にお申込みください。締め切りは9月30日（金）です。ふってご応募ください。なお、色紙の発送をもって発表にかえさせていただきます。

言の葉は
未来を
育む

では平等なのです。

つまり、言葉をホームグラウンドとするならば、いつの時代の誰をライバルに選んでもかまわない。柿本人麻呂かきものひとまろ、和泉式部いずみしきぶ、西行さいぎょうといった天才たちと私たちが対等に付き合うことも可能なのです。明治生まれの、石川啄木いしかわたくぼく、北原白きたはらはく秋しゅうをライバルに選んでもいいのです。短歌は小さな詩ですが、こう考えると広々とした世界が見えてきますね。一年二年の単位ではなく、百年単位で歴史とつきあうことができるのです。

私たちはふだん、ついつい短いスパンで過去や未来を見てしまいがちです。友人とか仲間とか、すぐ近くの人と自分をくらべてしまいがちです。そういう小さな枠組みのなかで自分をとらえて、追い詰められたり、逃げ場所がなかったり、思いつめてしまったりしがちです。

そんなときはこのエピソードを思い出して下さい。十三歳と六十二歳だって、同じ地平に立つことができるのです。大きな枠組みの中で自分を見なおしましょう。そうすればきっと、広い視野がひらけ、ふだんはみることができない遠い未来が見えてきたりするでしょう。

もし、長い時間のなかで自分を見、大きな枠組みの中で自分を考えることができれば、意外な自分と出会うことも可能なのです。一気に新しい道が開けることもあるのです。